第 1.1 版 2022 年 5 月 12 日

# 『考古圖釋文』模写字形一覧

広島大学総合科学部　鈴木俊哉

本資料は宋代成立とされる『考古圖釋文』所収の金文模写字形の一覧表である。中華書局の「宋人著録金文叢刊」に用いられて研究者の定本となっている四庫全書文淵閣本(以下、文淵閣本)と、叢書集成に用いられてこれ以前に広く流布した十萬卷樓翻刻本(以下、十萬卷樓本)の字形を示す。

## 1.　凡例

| | | 文淵 | 十萬 | |
|---|---|---|---|---|
| KGT-SW-001 | 文淵:葉04右.g01<br>十萬:頁06.g01 | | | 東/德紅反//東宮方鼎 |
| KGT-SW-002 | 文淵:葉04右.g02<br>十萬:頁06.g02 | | | 同/徒紅反//邢敦/説文作同 |

表の欄は左より以下の並びである。

① 項番

KGT-SW-ddd という形式で掲出順に並べているが、十萬卷樓翻刻本の順序を優先している(理由については後述)。

② 掲出箇所

文淵閣本については葉番号・左右によって頁を示し(葉 04 右)、頁内の金文字形の通し番号を付加する(g01 など)。

十萬卷樓本については、叢書集成の影印本の頁番号と(頁 06)、頁内の金文字形の通し番号を付加する(g01 など)。

③ 文淵閣本の模写字形

④ 十萬卷樓本の模写字形

⑤ 隷定字、反切、器物名

考古圖釋文はある隷定字に対して複数の金文字形を示す。最初に隷定字を楷書で示し、それに対して反切などの、特定の器物での字形に寄らない全般的な文字情報が割注で添えられる。それに続いて、金文字形が示され、各々に出典器物名が添えられるが、場合によってはその字形に関して説文を引いた解説が加わることもある。これらは個別の文字情報と見られる。

この欄では「//」区切りの前が全般的な文字情報で、区切り以降が個別の文字情報である。この中に説文から引かれた小篆が見えることがあるが、それらは = で置き換えている。典拠は文淵閣本である。

## 2.　項番が文淵閣本の順序と異なることについて

現在は考古圖釋文として広く通行しているのは文淵閣本の影印とみられるが、十萬卷樓本と比較すると以下の違いがある[1]。

[1] ここで挙げた違いについては文津閣本の状況も文淵閣本と同様である。

- 「敬」(KGT-SW-602, -603)は、十萬卷樓本が 2 例掲出するのに対し、文淵閣本は 1 例しか掲出していない。十萬卷樓本での第 2 例(KGT-SW-603)が文淵閣本では脱落している。また、十萬卷樓本は第 1 例を寅簋より、第 2 例を秦鐘から採っているが、文淵閣本は第 1 例を寅簋から採ったことになっている。
- 「穆」(KGT-SW-639～642)は、十萬卷樓本が 4 例掲出するのに対し、文淵閣本は 3 例しか掲出していない。第 3 例(KGT-SW-641)は文淵閣本では脱落している。第 2 例と第 3 例は非常によく似ているため、十萬卷樓本にもやや疑問があるが、出展の器物名が 2 つの例で異なっている。
- 「鼎」(KGT-SW-466, -467)の 2 例は迴韻(廣韻では上声 41)に排されるが、十萬卷樓本は迴韻を静韻(廣韻では上声 40、「静」を例示する)と有韻(廣韻では上声 44、「又」[2]「右」などを例示する)の間に掲出するのに対し、文淵閣本では儼韻(廣韻では上声 52、「导」を例示する[3])と宋韻(廣韻では去声 02、「宋」を例示する)の間に掲出する。反切が廣韻・集韻と同じ「都梃(挺)反」[4]であるところから判断すると、十萬卷樓本の配置が正しいと思われる。

以上より、原本ではなく後人の校正によっている可能性はあるが、十萬卷樓本の順序がより正しいと判断し、項番はこれに従うこととした。

### 3. 十萬卷樓本の底本について

静嘉堂文庫には十萬卷樓の陸心源旧蔵の續考古圖・考古圖釋文の写本が蔵されている(十萬卷樓舊藏本 11 函 53 架)。考古圖釋文に関しては、上記の文淵閣本・十萬卷樓本の違いの部分は全て十萬卷樓本と同じである(また行款も符合する)。このことから十萬卷樓本はこの写本を底本としたと考えられる。この写本には乾隆 44 年の翁方綱の跋文があり[5]、四庫全書本との関係についてさらなる調査が必要である。

### 4. 反切について

反切表記に某某反と某某切の 2 形式が混じっているが、文淵閣本でも十萬卷樓本でも同様である。

**謝辞**

本表は科研費課題番号 19K12716 の成果です。訪問による文献調査が困難な社会情勢下にあり、静嘉堂文庫、広島大学図書館の方々に多大なる御助力を頂きました。

**参考文献**

『考古圖釋文』 文淵閣四庫全書 台湾商務印書館 子部 146 譜録類(第 840 冊) pp.351-370

『考古圖釋文』 叢書集成初編 「鼎録及其他二種」所収 十萬卷樓刊本

**変更履歴**

1.0 (2022/05/11) 公開。

1.1 (2022/05/12) 解題のみ更新。反切、科研費課題番号、参考文献を追加。

---

[2] 廣韻では「又」は去声 49 の宥韻に排される。考古圖釋文では「云九切。與有字同。」と注されているので、隷定字形は「又」であっても用法は「有」と判断して、韻書では「有」を排すべき位置に置いたと思われる。

[3] 廣韻では「导」は上声 50 の琰韻に排される。

[4] 切韻では「丁茗反」(切三)や「丁挺反」(王三)である。

[5] 一見すると翁方綱が作成した写本に見えるが、その複製という可能性も否定できない。